

花のき村と盗人たち

新美南吉

青空文庫

むかし、花はなのき村むらに、五人組にんぐみの盗人ぬすびとがやって来きました。

それは、若竹わかたけが、あちこちの空そらに、かぼそく、ういういしい
 緑みどり色いろの芽めをのぼしている初夏しよかのひるで、松まつ林ばやしでは松まつ蟬ぜみ
 が、ジイジイジイと鳴ないていました。

盗人ぬすびとたちは、北きたから川かわに沿そってやっきて来きました。花はなのき村むらの
 入り口ぐちのあたりは、すかんぽやうまごやしの生はえた緑みどりの野原のはらで、
 子供こどもや牛うしが遊あそんでおりみました。これだけを見みても、この村むらが平和へいわ
 な村むらであることが、盗人ぬすびとたちにはわかりました。そして、こん

な村には、お金やいい着物を持った家があるに違いないと、もう喜んだのでありました。

川は藪の下を流れ、そこにかかっている一つの水車をゴトンゴトンとまわして、村の奥深くは行っていきました。

藪のところまで来ると、盗人のうちのかしらが、いいました。「それでは、わしはこの藪のかげで待っているから、おまえらは村のなかへは行って行って様子をみて来い。なにぶん、おまえらは盗人になったばかりだから、へまをしないように気をつけるんだぞ。金のありそうな家を見たら、その家のどの窓がやぶれそうか、その家に犬がいるかどうか、よつくしらべるのだぞ。いいか釜右工門。」

「へえ。」

と釜右工門かまえもんが答こたえました。これは昨日きのうまで旅たびあるきの釜師かましで、釜かまや茶釜ちやがまをつくつていたのであります。

「いいか、海老之丞えびのじょう。」

「へえ。」

と海老之丞えびのじょうが答こたえました。これは昨日きのうまで錠前屋じょうまえやで、家々いえいえの倉くらや長持ながもちなどの錠じょうをつくつていたのであります。

「いいか角兵かくべえ。」

「へえ。」

とまだ少しょう年ねんの角兵かくべえが答こたえました。これは越後えちごから来きた角兵かくべえで、昨日きのうまでは、家々いえいえの闕しきいの外そとで、逆立さかだちしたり、とん

ぼがえりをうったりして、一文二文の銭を貰っていたのでありま
した。

「いいか鉋太郎。」

「へえ。」

と鉋太郎が答えました。これは、江戸から来た大工の息子で、
昨日までは諸国のお寺や神社の門などのつくりを見て廻り、
大工の修業していたのでありました。

「さあ、みんな、いけ。わしは親方だから、ここで一服すい
ながらまっつている。」

そこで盗人の弟子たちが、釜右門は釜師のふりをし、海老
之丞は錠前屋のふりをし、角兵衛は獅子まいのように笛をヒヤ

ラヒヤラ鳴らし、かな 鉋太郎はかんたろう 大工のふりをして、だいく 花のはな 木村にはむら いりこんでいきました。

かしらは弟子でしどもがいつてしまうと、どつかと川かわ ばたの草くさの上うえに腰こしをおろし、弟子でしどもに話はなしたとおりに、たばこをスツパ、スツパとすいながら、盗ぬすびと人のようかおな顔つきをしていました。これは、ずっとまえから火ひつけや盗ぬすびと人をして来たきほんとうの盗ぬすびと人でありました。

「わしも昨日きのうまでは、ひとりぼっちの盗ぬすびと人であつたが、今日きょうは、はじめに盗ぬすびと人の親おやかた方かたというものになつてしまった。だが、親お方かたになつて見みると、これはなかなかいいもんだわい。仕事しごとは弟で子どもがして来きてくれるから、こうして寝ねころんで待まつておれば

いいわけである。」

とかしらは、することがないので、そんなつまらないひとりごとをいってみたりしていました。

やがて弟子でしの釜右かまえもん工門もどが戻もどつて来きました。

「おかしら、おかしら。」

かしらは、ぴよこんとあざみの花はなのそばから体からだを起おこしました。

「えいくそツ、びつくりした。おかしらなどと呼よぶんじゃねえ、
魚さかあたまの頭あたまのように聞きこえるじゃねえか。ただかしらといえ。」

盗ぬすびと人ひとになりたての弟子でしは、

「まことに相あいすみません。」

とあやまりました。

「どうだ、村の中の様子は。」

とかしらがききました。

「へえ、すばらしいですよ、かしら。ありました、ありました。」

「何が。」

「大きい家がありましたね、その飯炊き釜は、まず三斗ぐらい

は炊ける大釜でした。あれはえらい銭になります。それから、

お寺に吊つてあつた鐘も、なかなか大きなもので、あれをつぶせ

ば、まず茶釜が五十はできます。なあに、あつしの眼に狂いは

ありません。嘘だと思ふなら、あつしが造つて見せましょう。」

「馬鹿馬鹿しいことに威張るのはやめろ。」

とかしらは弟子を叱りつけました。

「きさまは、まだ釜師根性がぬけんからだめだ。そんな飯炊き釜や吊り鐘などばかり見てくるやつがあるか。それに何だ、その手に持っている、穴のあいた鍋は。」

「へえ、これは、その、或る家の前を通りますと、槇の木の生け垣にこれがかけて干してありました。見るとこの、尻に穴があいていたのです。それを見たら、じぶんが盗人であることをつい忘れてしまつて、この鍋、二十文でなおしましょう、とそこのおかみさんにいつてしまつたのです。」

「何というまぬけだ。じぶんのしょうばいは盗人だということをしつかり肚にいれておらんから、そんなことだ。」

と、かしらはかしららしく、弟子に教えました。そして、

「もういつぺん、村にもぐりこんで、しつかり見なおして来い。」
と命じました。釜右工門は、穴のあいた鍋をぶらんぶらんとふり
ながら、また村にはいつていきました。

こんどは海老之丞がもどつて来ました。

「かしら、ここの村はこりやだめですね。」
と海老之丞は力なくいきました。

「どうして。」

「どの倉にも、錠らしい錠は、ついておりません。子供でもねじ
きれそうな錠が、ついておるだけです。あれじゃ、こつちのしよ
うばいにやなりません。」

「こつちのしよばいというのは何だ。」

「へえ、……錠前……屋。」

「きさまもまだ根性がかわつておらんツ。」

とかしらはどなりつけました。

「へえ、相すみません。」

「そういう村こそ、こつちのしようばいになるじやないかつ。倉があつて、子供でもねじきれそうな錠しかついておらんというほど、こつちのしようばいに都合のよいことがあるか。まぬけめがもういっぺん、見なおして来い。」

「なるほどね。こういう村こそしようばいになるのですね。」

と海老之丞は、感心しながら、また村にはいつていきました。

次にかえつて来たのは、少年の角兵エでありました。角兵

工べえは、笛ふえを吹ふきながら来きたので、まだ藪やぶの向むこうで姿すがたの見みえないうちから、わかりました。

「いつまで、ヒヤラヒヤラと鳴ならしておるのか。盗ぬすびと人はなるべく音おとをたてぬようにしておるものだ。」

とかしらは叱しかりました。角兵工かくべえは吹ふくのをやめました。

「それで、きさまは何なにを見みて来きたのか。」

「川かわについてどんどん行いきましたら、花菖蒲はなしょうぶを庭にわいちめんに咲さかせた小ちいさい家いえがありました。」

「うん、それから?」

「その家いえの軒下のきしたに、頭あたまの毛けも眉毛まゆげもあごひげもまつしろな爺じいさんさいがいました。」

「うん、その爺じいさんが、小判こばんのはいつた壺つぼでも縁えんの下したに隠かくして
 そうな様子ようすだったか。」

「そのお爺じいさんが竹笛たけぶえを吹ふいておりました。ちよつとした、つ
 まらない竹笛たけぶえだが、とてもええ音ねがしておりました。あんな、
 ふしぎうつくに美しい音ねははじめてきました。おれがききとれていた
 ら、爺じいさんはにこにこしながら、三つ長い曲ながきよくをきかしてくれまし
 た。おれは、お礼れいに、とんぼがえりを七へん、つづけざまにやつ
 て見みせました。」

「やれやれだ。それから？」

「おれが、その笛ふえはいい笛ふえだといつたら、笛竹ふえたけの生はえている竹た
 藪けやぶを教おしえてくれました。その竹たけで作つくった笛ふえだそうです。それ

で、お爺おじいさんの教おしえてくれた竹たけ藪やぶへいつて見みました。ほんとうにええ笛ふえ竹たけが、何なん百ひゃくすじも、すいすいと生はえておりました。「昔むかし、竹たけの中なかから、金きんの光ひかりがさしたという話はなしがあるが、どうだ、小判こばんでも落おちていたか。」

「それから、また川かわをどんどんくだつていくと小ちいさい尼あま寺でらがありました。そこで花はなの撓とうがありました。お庭にわにいつぱい人ひとがいて、おれの笛ふえくらいの大おおきさのお釈しや迦かさまに、あま茶ちやの湯ゆをかけておりました。おれもいつぱいかけ、それからいつぱい飲のましてもらつて来きました。茶ちやわんがあるならかしらにも持もつて来きてあげましたのに。」

「やれやれ、何なんという罪つみのねえ盗ぬす人びとだ。そういう人ひとごみの中なかで

は、人のふところや袂たもとに気きをつけるものだ。とんまめが、もうい
つぺんきさまもやりなおして来い。その笛ふえはここへ置いていけ。」
角兵かくべえ五ごは叱しかられて、笛ふえを草くさの中なかへおき、また村むらにはいつていき
ました。

おしまいかえに帰かえつて来たきたのは鉋かんな太郎たろうでした。

「きさまも、ろくなものは見みて来こなかつたろう。」
と、きかないさきから、かしらがいいました。

「いや、金持かねもちがありました、金持かねもちが。」
と鉋かんな太郎たろうは声こゑをはずませていいました。金持かねもちときいて、かし

らはにこにこことしました。

「おお、金持かねもちか。」

「金持ちかねもちです、金持ちかねもちです。すばらしいりっぱな家いえでした。」

「うむ。」

「その座敷ざしきの天井てんじょうと来たきら、さつま杉すぎの一枚板いちまいいたなんで、こ
んなのを見たみたら、うちの親父おやじはどんなに喜よろこぶかも知しれない、と思おも
つて、あつしは見みとれていました。」

「へつ、面白おもしろくもねえ。それで、その天井てんじょう井いをはずしてでも
来くる気きかい。」

鮑太郎かんなたろうは、じぶんが盗人ぬすびとの弟子でしであつたことを思い出おもしま
した。盗人ぬすびとの弟子でしとしては、あまり気きが利きかなかつたことがわ
かり、鮑太郎かんなたろうはバツのわるい顔かおをしてうつむいてしまいました。
そこで鮑太郎かんなたろうも、もういちどやりなおしに村むらにはいつていき

ました。

「やれやれだ。」

と、ひとりになったかしらは、草くさの中なかへ仰あおむ向けにひっくりかえつ
ていいました。

「盗ぬすびと人のかしらというのもあんがい楽らくなしようばいではないて
。」

二

とつぜん、

「ぬすとだツ。」

「ぬすとだツ。」

「そら、やつちまえツ。」

という、おおぜいの子供の声こども こえがしました。子供の声こども こえでも、こういうことを聞きいては、盗人ぬすびととしてびつくりしないわけにはいかないので、かしらはひよこんと跳とびあがりしました。そして、川かわにとびこんで向むこう岸ぎしへ逃にげようか、藪やぶの中なかにもぐりこんで、姿すがたをくらまそうか、と、とつさのあいだに考かんがえたのであります。

しかし子供達こどもたちは、縄切なわきれや、おもちやの十手じってをふりまわしながら、あちらへ走はしつていきました。子供達こどもたちは盗人ぬすびとごっこをしていたのでした。

「なんだ、子供達こどもたちの遊あそびごとか。」

とかしらは張り合いがぬけていいました。

「遊びごとにしても、盗人ごつことはよくない遊びだ。いまだきの子供はろくなことをしなくなつた。あれじゃ、さきが思いやられる。」

じぶんが盗人のくせに、かしらはそんなひとりごとをいいながら、また草の中にねころがろうとしたのでありました。そのときうしろから、

「おじさん。」

と声をかけられました。ふりかえって見ると、七歳ぐらいの、かわいらしい男の子が牛の仔をつれて立っていました。顔だちの品のいいところや、手足の白いところを見ると、百姓の子供と

は思おもわれませせん。且だ那なん衆しゆうの坊ぼつちやんが、下げ男なんについて野のあそびびにき来て、下げ男なんにせがんで仔こ牛うしを持もたせてもらつたのかも知しれません。だがおかしいのは、遠とくへでもいく人のように、白しろい小さい足あしに、小ちいわらじ草わらじ鞋せをはいていることでした。

「この牛うし、持もつていてね。」

かしらが何なにもいわないさきに、子こ供どもはそういつて、ついとそばに来きて、赤あかたづな手た綱なをかしらの手にあずけました。

かしらはそこで、何なにかいおうとして口くちをもぐもぐやりましたが、まだいい出ださないうちに子こ供どもは、あちらの子こ供どもたちのあとを追おつて走はしつていつてしまいました。あの子こ供どもたちの仲間なかまになるために、この草わらじ鞋せをはいた子こ供どもはあとをも見ずにいつてしまいました。

ぼけんとしてゐるあいだに牛の仔を持たされてしまったかしらは、くつくつと笑いながら牛の仔を見ました。

たいてい牛の仔というものは、そこらをぴよんぴよんはねまわつて、持つてゐるのがやつかいなものですが、この牛の仔はまたたいそうおとなしく、ぬれたうるんだ大きな眼をしばたたきながら、かしらのそばに無心に立つてゐるのでした。

「くつくつくつ。」

とかしらは、笑いが腹の中からこみあげてくるのが、とまりませんでした。

「これで弟子たちに自慢ができるて。きさまたちが馬鹿づらさげで、村の中をあるいてゐるあいだに、わしはもう牛の仔をいつび

盗ぬすんだ、といつて。」

そしてまた、くつくつくつと笑わらいました。あんまり笑わらったので、
こんどは涙なみだが出て来きました。

「ああ、おかしい。あんまり笑わらったんで涙なみだが出て来きやがった。」
ところが、その涙なみだが、流ながれて流ながれてとまらないのでありました。
「いや、はや、これはどうしたことだい、わしが涙なみだを流ながすなんて、
これじゃ、まるで泣ないてるのと同じおなじじゃないか。」

そうです。ほんとうに、盗ぬすびと人ひとのかしらは泣ないていたのであり
ます。——かしらは嬉うれしかったのです。じぶんは今いままで、人ひとから
冷つめたい眼めでばかり見みられて来きました。じぶんが通とおると、人ひと々は
そら変へんなやつが来きたといわんばかりに、窓まどをしめたり、すだれを

おろしたりしました。じぶんが声をかけると、笑いながら話しておろした人たちも、きゆうに仕事のことを思い出したように向こうをむいてしまうのでありました。池の面にうかんでいる鯉でさえも、じぶんが岸に立つと、がぼツと体をひるがえしてしずんでいくのでありました。あるとき猿廻しの背中に負われている猿に、柿の実をくれてやったら、一口もたべずに地べたにすててしまいました。みんながじぶんを嫌っていたのです。みんながじぶんを信用してはくれなかつたのです。ところが、この草鞋をはいた子供は、盗人であるじぶんうしに牛の仔こをあずけてくれました。じぶんをいい人間にんげんであると思つてくれたのでした。またこの仔牛こうしも、じぶんをちつともいやがらず、おとなしくしております。

す。じぶんが母牛ははうしでもあるかのようには、そばにすりよつて
 ます。子供も仔牛こうしも、じぶんを信用しんようしているのです。こんなこ
 とは、盗人ぬすびとのじぶんには、はじめてのことでもあります。人に信
 用んようされるといふのは、何なんといううれいことでありましょう。

……

そこで、かしらはいま、美しい心うつくになつていたのでありました。
 子供こどものころにはそういう心こころになつたことがありましたが、あれか
 ら長い間なが、わるい汚い心きたなでずっといたのです。久しぶりでかしら
 は美しい心うつくになりました。これはちようど、垢まみれの汚きたな着物きもの
 を、きゆうに晴はれ着ぎにきせかえられたように、奇妙きみようなぐあいで
 ありました。

——かしらの眼めから涙なみだが流ながれてとまらないのはそういうわけな
のでした。

やがて夕方ゆうがたになりました。松まつ蟬ぜみは鳴なきやみました。村むらから
は白しろい夕ゆうもやがひっそりと流ながれだして、野のの上うへにひろがっていき
ました。子供こどもたちは遠とおくへいき、「もういいかい。」「まあだだ
よ。」という声こえが、ほかのもの音おととまじりあつて、ききわけにく
くなりました。

かしらは、もうあの子供こどもが帰かえつて来るじぶんだと思おもつて待まつて
いました。あの子供こどもが来きたら、「おいしよ。」と、盗人ぬすびとと思おもわ
れぬよう、こころよく仔牛こうしをかえしてやろう、と考かんがえていました。
だが、子供こどもたちの声こえは、村むらの中なかへ消きえていつてしまいました。

草鞋の子供は帰つて来ませんでした。村の上にかかっていた月が、かがみ職人の磨いたばかりの鏡のように、ひかりはじめました。あちらの森でふくろうが、一一声ずつくぎつて鳴きはじめました。

仔牛はお腹がすいて来たのか、からだをかしらにすりよせました。

「だって、しようがねえよ。わしからは乳は出ねえよ。」
 そういつてかしらは、仔牛のぶちの背中をなでていました。まだ眼から涙が出ていました。

そこへ四人の弟子がいつしよに帰つて来ました。

三

「かしら、ただいま戻りました。おや、この仔牛はどうしたので
すか。ははア、やっぱりかしらはただの盗人じゃやない。おれた
ちが村を探りにいつていたあいだに、もうひと仕事しちやつたの
だね。」

釜右エ門が仔牛を見ていいました。かしらは涙にぬれた顔を見
られまいとして横をむいたまま、

「うむ、そういつてきさまたちに自慢しようと思つていたんだが、
じつはそうじゃねえのだ。これにはわけがあるのだ。」
といいました。

「おや、かしら、涙……じやございませんか。」

と海老之丞が声を落としてききました。

「この、涙てものは、出はじめると出るもんだな。」

といつて、かしらは袖で眼をこすりました。

「かしら、喜んで下せえ、こんどこそは、おれたち四人、しつか

り盗人根性になつて探つて参りました。釜右工門は金の茶

釜のある家を五軒見とどけますし、海老之丞は、五つの土蔵の

錠をよくしらべて、曲がつた釘一本であけられることをたしかめ

ますし、大工のあツしは、この鋸で難なく切れる家尻を五つ見

来ましたし、角兵五は角兵五でまた、足駄ばきで跳び越えられる

塀を五つ見て来ました。かしら、おれたちはほめて頂きとうござ

います。」

と鉋太郎かんなたろうが意気いきこんでいいました。しかしかしらは、それに答こたえないで、

「わしはこの仔牛こうしをあずけられたのだ。ところが、いまだに、取りとに來こないので弱よわつているところだ。すまねえが、おまえら、手てわけして、預あずけていった子供こどもを探さがしてくれねえか。」

「かしら、あずかった仔牛こうしをかえすのですか。」
と釜右エ門かまえもんが、のみこめないような顔かおでいいました。

「そうだ。」

「盗ぬすびと人ひとでもそんなことをするのでござえますか。」

「それにはわけがあるのだ。これだけはかえすのだ。」

「かしら、もつとしつかり盗ぬす人根性こんじょうになつて下くだせえよ。」
と鉋かんな太郎たろうがいました。

かしらは苦笑にがわらいしながら、弟子でしたちにわけをこまかく話はなして
きかせました。わけをきいて見みれば、みんなにはかしらの心持こころも
ちがよくわかりました。

そこで弟子でしたちは、こんどは子供こどもをさがしに行くことになりま
した。

「草鞋わらじをはいた、かわいらしい、七つぐれえの男坊主おとこぼうずなんです
ね。」

とねんをおして、四人にんの弟子でしは散ちつていきました。かしらも、も
うじつとしておれなくて、仔牛こやしをひきながら、さがしにいきまし

た。

月のあかりに、野茨とうつぎの白い花がほのかに見えている
 村の夜を、五人の大人の盗人が、一匹の仔牛をひきながら、子
 供をさがして歩いていくのでありました。

かくれんぼのつづきで、まだあの子供がどこかにかくれている
 かも知れないというので、盗人たちは、みみずの鳴いている辻
 堂の縁の下や柿の木のうえ、物置の中や、いい匂いのする蜜
 柑の木のかげを探してみましたのでした。人にきいてもみただけでした。

しかし、ついにあの子供は見あたりませんでした。百姓

達は提燈に火を入れて来て、仔牛をてらして見たのですが、
 こんな仔牛はこの辺りでは見たことがないというのでした。

「かしら、こりや夜つびて探してもむだらしい、もう止しましよ
う。」

と海老之丞がくたびれたように、道ばたの石に腰をおろしていい
ました。

「いや、どうしても探し出して、あの子供にかえしたいのだ。」
とかしらはききませんでした。

「もう、てだてがありませんよ。ただひとつ残っているてだては、
村役人のところへ訴えることだが、かしらもまさかあそこへは
行きたくないでしょう。」

と釜右エ門がいました。村役人というのは、いまでいえば駐
在巡査のようなものであります。

「うむ、そうか。」

とかしらは考えこみました。そしてしばらく仔牛の頭をなでてい
ましたが、やがて、

「じゃ、そこへ行こう。」

といいました。そしてもう歩きだしました。弟子たちはびつくり
しましたが、ついていくよりしかたがありませんでした。

たずねて村役人の家へいくと、あらわれたのは、鼻の先に落
ちかかるように眼鏡をかけた老人でしたので、盗人たちはま
ず安心しました。これなら、いざというときに、つきとばして
逃げてしまえばいいと思つたからであります。

かしらが、子供のことを話して、

「わしら、その子供を見失つて困つております。」

といたしました。

老人は五人の顔を見まわして、

「いっこう、このあたりで見受けぬ人ばかりだが、どちらから参つた。」

とききました。

「わしら、江戸から西の方へいくものです。」

「まさか盗人ではあるまいの。」

「いや、とんでもない。わしらはみな旅の職人です。釜師や大工や錠前屋などです。」

とかしらはあわてていたしました。

「うむ、いや、変なことをいつてすまなかつた。お前達は盗ぬすび

人ではない。盗ぬすび人が物ものをかえすわけがないでの。盗ぬすび人なら、

物ものをあずかれば、これさいわいとくすねていつてしまはずだ。

いや、せつかくよい心こころで、そうして届けとどに来たのを、変なことを

申もうしてすまなかつた。いや、わしは役目やくめがら、人を疑ひとうくせにな

っているのじゃ。人を見みさえすれば、こいつ、かたりじやないか、

すりじやないかと思おもうようなわけさ。ま、わるく思おもわないでくれ

。

と老ろうじん人はいいいわけをしてあやまりました。そして、仔牛こうしはあず

かつておくことにして、下男げなんに物置ものおきの方ほうへつれていかせました。

「旅たびで、みなさんお疲つかれじやろ、わしはいまい酒さけをひとびん西にし

の館やかたの太郎たろうどんからもらったので、月つきを見ながら縁えん側がわでやろうとしていたのじゃ。いいところへみなさんこられた。ひとつつきあいなされ。」

ひとの善よい老ろう人じんはそういつて、五人にんの盗ぬす人びとを縁えん側がわにつれていきました。

そこで酒さけをのみはじめましたが、五人にんの盗ぬす人びとと一人ひとりの村役むらやく人にんはすっかり、くつろいで、十年ねんもまえからの知しり合あいのよう
に、ゆかいに笑わらつたり話はなしたりしたのでありました。

するとまた、盗ぬす人びとのかしらはじぶんの眼めが涙なみだをこぼしている
ことに気きがつかしました。それを見た老ろう人じんの役やく人にんは、

「おまえさんは泣なき上じょう戸ごと見みえる。わしは笑わらい上じょう戸ごで、泣ない

ている人を見つるとよけい笑えて来る。どうか悪く思わんでくださいや、笑うから。」
「いって、口をあけて笑うのでした。」

「いや、この、涙というやつは、まことにとめどなく出るものだね。」

とかしらは、眼をしばたきながらいいました。

それから五人の盗人は、お礼をいって村役人の家を出ました。

門を出て、柿の木のそばまで来ると、何か思い出したように、かしらが立ちどまりました。

「かしら、何か忘れものでもしましたか。」

と鉤太郎かんなたろうがききました。

「うむ、忘れもんがある。おまえらも、いつしよにもういつペン
来い。」

といつて、かしらは弟子でしをつれて、また役人やくにんの家いえにはいつてい
きました。

「御老人ごろうじん。」

とかしらは縁側えんがわに手てをついていいました。

「何なんだね、しんみりと。泣なき上戸じょうごのおくの手てがで出るかな。はは

は。」

と老人ろうじんは笑わらいました。

「わしらはじつは盗人ぬすびとです。わしがかしらでこれらは弟子でしです

「それを引きくと老人は眼をまるくしました。

「いや、びつくりなさるのはごもつともです。わしはこんなこと
はくじよう

を白状するつもりじゃありませんでした。しかし御老人が

こころ心のよいお方で、わしらをまつとうな人間にんげんのように信じていて

くだ下さるのを見ては、わしはもう御老人ごろうじんをあざむいていることが

できなくなりました。」

そういつて盗人ぬすびとのかしらは今までして来たきわるいことをみな

はくじよう白状してしまいました。そしておしまいに、

「だが、これらは、昨日きのうわしの弟子でしになつたばかりで、まだ何なにも
わる悪いことはしておりません。お慈悲じひで、どうぞ、これらだけは許ゆる

してやって下さい。」
 といいました。

次の朝、花のき村から、釜師と錠前屋と大工と角兵五獅子とが、それぞれべつの方へ出ていきました。四人はうつむきがちに、歩いていきました。かれらはかしらのことを考えていました。よいかしらであつたと思つておりました。よいかしらだから、最後にかしらが「盗人にももうけつしてなるな。」といったことばを、守らなければならぬと思つておりました。

角兵五は川のふちの草の中から笛を拾つてヒヤラヒヤラと鳴らしていきました。

四

こうして五人の盗人は、改心したのでしたが、そのもとになつたあの子供はいつたい誰だつたのでしよう。花のき村の人々は、村を盗人の難から救つてくれた、その子供を探して見たのですが、けつきよくわからなくて、ついには、こういうことにきまりました、——それは、土橋のたもとにむかしからある小さい地藏さんだろう。草鞋をはいていたというのがしようこである。なぜなら、どういうわけか、この地藏さんには村人たちがよく草鞋をあげるので、ちようどその日も新しい小さい草鞋が地

蔵ぞうさんの足あしもとにあげられてあつたのである。——というのでした。

地蔵じぞうさんが草鞋わらじをはいて歩あるいたというのは不思議ふしぎなことですが、世よの中なかにはこれくらいの不思議ふしぎがあつてもよいと思おもわれます。それに、これはもうむかしのことなのですから、どうだつて、いいわけです。でもこれかもしほんとうだつたとすれば、花はなのき村むらのひとびと人々ひとびとがみな心の善よい人々ひとびとだつたので、地蔵じぞうさんが盗ぬすび人ひとから救すくつてくれたのです。そうならば、また、村むらというものは、心こころのよい人々ひとびとが住すまねばならぬということにもなるのであります。

青空文庫情報

底本：「いんぎつね・夕鶴 少年少女日本文学館第十五巻」講談社

1986（昭和61）年4月18日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第13刷発行

初出：「花のき村と盗人たち」帝国教育会出版部

1943（昭和18）年9月30日

入力：田浦亜矢子

校正：もりみつじゅんじ

1999年10月25日公開

2012年5月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

花のき村と盗人たち

新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>